

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19830082

研究課題名（和文） メタ・コミュニケーション能力の向上に関わる要因の検討

研究課題名（英文） The study on enhancing meta-communication skills

研究代表者

磯 友輝子（ISO YUKIKO）

東京未来大学・こども心理学部・講師

研究者番号：00432435

研究成果の概要：対人関係を俯瞰・調整する力であるメタ・コミュニケーション能力に関連する要因を整理し、その向上方法を検討するため、大学生を対象とした調査、実験を行った。その結果、社会的スキルとコミュニケーションの知識の保有に関連が見られた。また、会話時の自分の映像の視聴機会があると相手からの印象の推定を容易にするとした予測は支持されなかったが、社会的スキルが高い場合には、視聴後に再度会話をすると視線行動に変化がみられ、ビデオフィードバックと視線行動を取りかかるとしたトレーニングの可能性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,210,000	0	1,210,000
2008 年度	1,150,000	345,000	1,495,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,360,000	345,000	2,705,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的相互作用・対人関係 対人コミュニケーション 自己過程 社会的スキル
メタ・コミュニケーションスキル

1. 研究開始当初の背景

近年、若者のコミュニケーション能力の低下が問題視されている。特に、相手の立場や場の空気を察して、自らの思考・行動、相互作用を俯瞰したり、調整するような高度な人間関係力、すなわちメタ・コミュニケーション能力の向上が求められる。また、遠慮や察しといった伝統的行動様式を持つ日本に育ちながら、インターネット社会の拡大や多様な文化との接触機会が増した社会に育った青年期の段階では、多様な年齢層との接触経

験が少ないことから、様々なコミュニケーションに関する知識が未精緻であり、そのことがコミュニケーション力の向上を妨げている原因としても考えられる。

そこで、申請者がこれまで行ってきた社会的スキルや非言語コミュニケーションに関する知見を踏まえて、メタ・コミュニケーションに関わる要因の関連性を整理し、若者のメタ・コミュニケーション能力の向上をもたらす方略の提出を目指す。

2. 研究の目的

(1) まず、コミュニケーションに関する知識の保有程度を測定する尺度を作成する。その上で、知識の保有の程度と社会的スキルとの関連性を検討する。適切な知識を持ち、かつ高い社会的スキルを持つことがメタ・コミュニケーション能力の高さとして想定される。

(2) 次に、メタ・コミュニケーション能力の向上方法について検討する。本研究では、メタ・コミュニケーション能力の向上を示す指標としてメタ知覚を用いる。メタ知覚とは、自分がどのように相手見られているかという推測を意味するが、自身の姿をビデオによりフィードバックすることがメタ知覚の向上をもたらすという先行研究もいくつか見られる(e.g., Albright & Malloy, 1999)。そこで、社会的スキルの程度によって会話中の自分の姿を見ることがメタ知覚にどのような効果をもたらす、その後の会話にどのような変化を与えるのかを検討する。

3. 研究の方法

(1) コミュニケーションの知識に関する尺度の作成のため、まず、海外で用いられた非言語コミュニケーションに関する尺度の邦訳を行い、その後、コミュニケーション研究者3名によって文化的影響を考慮に入れて尺度項目を精査した。既存の社会的スキル尺度と併せて男女大学生302名を対象とした調査を実施し、さらに、半期間のコミュニケーションに関する講義の受講後にも同一の調査に回答を求めた。

(2) (1)で作成した尺度のほかに、コミュニケーションの知識の保有を測定する指標の検討のため、先に申請者が行ったコミュニケーション行動の認知に関する調査データ(対象者:男女大学生393名)の再分析を行った。

(3) メタ・コミュニケーション能力の1つであるメタ知覚の向上方法の検討のため、女子大学生・大学院生39名を対象に会話実験を行った。初対面同性との会話に参加した直後に会話中の映像をフィードバックし、再度会話に参加させた。その際、自分の印象の推測を尋ね、社会的スキルによるメタ知覚の向上と発話量および非言語的行動(視線、笑顔、うなずき)の変化を検討した。

4. 研究成果

(1) コミュニケーションの知識の保有と社会的スキル尺度を用いた調査の結果、両者に有意な関連性が見られた。またコミュニケーションの講義の受講後には、社会的スキル得点が上がっており、メタ・コミュニケーション能力の基盤となる社会的スキル向上方法と

して、講義型の知識提供の有効性も示された。

(2) コミュニケーション行動と社会的スキルの重要性を検討した調査の再分析の結果、二者間会話中に見られるコミュニケーション行動の重要性を高く評価している人ほど社会的スキルが高く、重要だと判断できることは、コミュニケーションの知識を得ていることによって可能な認知的な評価と考えられた。

(3) 会話実験の結果、社会的スキルが高い人ほど自分の印象の推測(メタ知覚)が正確であったが、映像のフィードバック前後での変化は見られなかった。しかしながら、セルフ・モニタリング傾向(以下、SM傾向)によって映像視聴前後での視線行動に変化が見られた。SM傾向は他者の行動に敏感で、状況に応じて自己の行動をコントロールする個人の傾向や社会的スキルとされており、認知・行動の両側面に注目できる能力という点で、メタ・コミュニケーション能力の1つとして考えられる。高SM傾向は自分と他者の映像が見られる(全体観察)条件で視線行動の変化が大きかったのに対し、低SM傾向は自分の映像だけを見る(自己観察)条件で変化が見られた。すなわち、自己の映像のみ入手可能な場合、低SM傾向は自己により注目が向き、視線行動を変容させ、高SM傾向は自分と他者の両方のコミュニケーション行動を参考にしながら視線行動を変えていることが示された(図1)。視線は好意の表出、モニタリング、会話調節など多様な機能を担うとされることから(Kendon, 1967)、社会的スキルが高い人は、映像のフィードバックによって自分の行動を他者の反応との対応で判断するために、視線に変化が生じたものと考えられた。

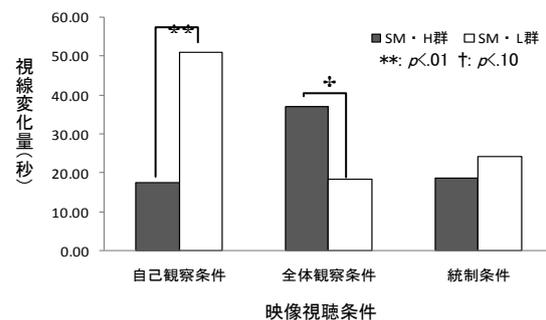


図1 視線行動の変化量における映像視聴条件とSM群の平均値

以上のようにメタ知覚向上の方略としてのビデオ利用の効果は見いだせなかったが、会話場面をフィードバックすることが社会的スキルの高い人にとっては有効であり、そ

の際、特に視線行動に変化がみられることが見出されたことから、映像をフィードバックする際の視点として会話者両者への注目を促し、特に視線行動の変化に注意を向けさせることが、メタ・コミュニケーション能力向上の手がかりとなる可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計4件)

- ① 磯友輝子・笠置遊・大坊郁夫 (2009). 会話の観察によるコミュニケーション行動への影響—セルフ・モニタリング傾向に着目して— 日本心理学会第73回大会, 立命館大学, 2009年8月26日
- ② 磯友輝子・大坊郁夫 (2008). コミュニケーションの上手さと社会的スキルの関係—二者間会話におけるコミュニケーション行動の重要性評価に注目して— 日本心理学会第72回大会, 北海道大学, 2008年9月19日.
- ③ Iso, Y., Kasagi, Y., & Daibo, I. (2008). The effect of videotape feedback of a dyadic interaction on meta-perception. 29th International Congress of Psychology(ICP2008), Berlin, 2008年7月23日.
- ④ 磯友輝子・笠置遊・大坊郁夫 (2007). 対人コミュニケーションにおけるメタ知覚の向上の試み—自己観察の手法を用いて— 日本心理学会第71回大会, 東洋大学, 2007年9月18日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

磯 友輝子 (ISO YUKIKO)

東京未来大学・こども心理学部・講師

研究者番号：00432435